

形容詞の意味記述に関する一考察

語義記述文の文末表現の分析から

佐 尾 ち と せ

【キーワード】語彙の体系化 上位名詞 上位形容詞 意味記述用語

0. はじめに

機械翻訳が積極的に試みられるようになり、一般の辞書にしても電子化が加速する中、語の意味を定義する方法を見直す動きがある。それは、個々の語を、できる限り客観的に体系化しようとするにつながると思われる。

語は本来、個別的なものであるから、たとえ語の指し示す事物が同一であっても、そこに複数の語が存在すれば、各々の語の意味するところは異なっている。そうであるからには、個々の語に対し、個別の方法で意味記述がなされても当然である。それを承知の上で、私は、共通した意味特徴をもつ語に対しては、共通の方法によって記述することが、ある程度までは必要であると考えている。これは語の個別的な意味の記述にとってはマイナスかもしれないが、それらが同じ意味特徴を持つものであるという属性が明確化され、語彙を体系化する一助となろう。

日本語学習者のように、成長の過程で、語彙を自然に拡大するのではない場合は、個々別々に語を示されるよりも、体系的に提示される方が理解しやすい。さらに、将来、ますます辞書の電子化が進めば、五十音順などのいわゆる辞書 (= dictionary) であっても、現行の類義語辞典 (= lexicon) 的な使い方、即ち、あるキーワードの下に意味記述文から見出し語を検索するような使い方、頻繁に行われるようになって考えられる。そうした目的をもって辞書を整備していくためには意味記述の文を、語の意味特徴によって統一していくことは必要であるとする。

辞書において、語義を説明している文にはいくつかのパターンがあるが、本稿では、特に、文末表現に着目し、形容詞を中心に、現行の辞書類における意味記述の方法を分析してみたい。

1 上位語と意味記述用語

1.1 上位名詞と上位形容詞

村木新次郎氏は、「一般に単語の意味は、意味特徴と上位語によって記述される。」^①と述べ、その例として「たんす」を挙げ、「『引出しや開き戸があり、衣類や茶器などを整理しておく木製の箱状の家具』のように記述されるが、『引出し...箱状の』の部分が意味特徴であり、『家具』が上位語にあたる。」^②としている。（注：ここまで、太字はすべて佐尾による。以下、注記のない限り同様。）

「たんす」は名詞であるため、その上位語として「家具」を想定することは容易である。そして、語義説明が「...の家具」と名詞で終止しても問題はないし、「たんす」の含まれている文全体の意味を理解しようとする際には、語義説明文をそのまま「たんす」に置き換えて考えることができる。

では、見出し語が形容詞の場合にはどうであろうか。形容詞の中でも、一部の感覚形容詞については、「色」の下に「青い」「赤い」、「味」の下に「あまい」「からい」等、形容詞の表す概念を包括する名詞を想定することは比較的容易で、それらを上位語と呼ぶことは可能であろう。1つの手がかりとして『分類語彙表』（以下、『語彙表』と略称する。）に当たると、「青い」は「3.502色」に、「甘い」は「3.505味」に分類されており、辞書の説明と矛盾がない。^③このように、形容詞に対して、その上位概念を表す名詞を本稿では上位名詞と呼んでおく。

大島中正氏は、三省堂『例解新国語辞典』（以下、『例解新』と略称する。）の語義説明のうち、「のろい=速度が、いらいらするぐらいおそい。」「むしあつい=風がなくて、湿度が高く、むしむしして暑い。」の2例を「見出し語の上位語を利用した語釈」とし、下線を施した「おそい」「暑い」という形容詞自体を見出し語の上位語と見なしている。^④『語彙表』でも、「のろい」は「3.194速い・遅い」の下、「遅い」と同グループに、「むし暑い」は「3.515気象」の下、「暑い」と同グループに属している。このように、その語自身より、より大きな概念を表す形容詞を、本稿では上位形容詞と呼ぶことにする。

基本語の範囲では、自身が上位形容詞になりうる語は多いが、他に上位形容詞を求められる語は少なく、逆に、基本語を超えた、感情の細かなニュアンスを表現するような複合語等は、突き詰めて言えばこういう概念、といいうる上位形容詞が想定しやすい。

1.2 意味記述用語

中野洋氏は、語義説明の文を「意味を記述している部分」と「それを文として成り立たせるための部分」とに分け、後者によく用いられる語を「意味記述用語」と名付けて

⑥ いる。中野氏が意味記述用語として具体的に挙げられたのは次の語である。

意・老人語・漢語・雅語・造語・造語成分・雅語的表現・強調表現・漢語的表現
尊称・関する・様子・状態・形容・変化・略・事柄

形容詞は、物の属性や状態を示す機能をもっているため、語義説明に、「～のような状態である」「～のように感じる」といった記述が見られる。大島氏はこういった語も、形容詞という全体の概念を包括するものとして「上位語相当の語」としておられる。確かに、感情形容詞に対しては、非常に上位の名詞として「感情」を、同様に、事物の属性を表す形容詞に対して「状態」等をおくことはできなくもない。だが、本稿の主旨は、形容詞を意味の上から体系化し、それに見合った意味記述の方法を模索することにあるので、より体系化しやすいよう、今少し下位の段階での上位名詞・形容詞を考えることとし、「感情」「状態」等は、中野氏の言われる「意味記述用語」として、区別しておく。

2. 上位語・意味記述用語の使用概観

2.1 色を表す形容詞における記述の実態

「赤い」「青い」「黒い」「白い」の4語は、すべて、色を表す基本的な形容詞であり、単純語であるという点でも共通している。先に述べたように、これらの上位名詞として「色」を立て、4語すべてに統一した記述方法を用いることには問題がない。表1は、これらの記述パターンをまとめたものである。同一辞書内で、4つの形容詞に対して異なる記述方法が採られている場合があることは今はおき、上位名詞を共有する4つの形容詞の記述だけでも、微妙に異なる9パターンが存在することが確認できる。

表1 「青い」「赤い」「黒い」「白い」の記述における上位語の使用実態

の 色 だ	『新明解』
色 である	『広辞苑』(青・赤・白)『新潮』(青・白)『例解新』(白)
「 」のような色 である	『広辞苑』(黒)『新潮』(黒)
色を している	『くもん』(青・赤)
の 色を している	『学ぶ人』『岩波』『現代例解』
「 」の 色を している	『例解新』(青)
「 」のような色を している	『例解新』(赤・黒)『くもん』(黒・白)
色を 呈する	『新潮』(赤)

には「赤」などの名詞が、「 」には、意味特徴の説明が入る。以下の表でも同じ。

これらの内、『新潮国語辞典』の「赤い」に対する「赤色を呈する」という記述のしかたは、色以外の他の形容詞についても「～を呈する」という意味記述用語として応用することは可能であるが、ことさらに説明を難しくしているといえなくもない。少なく

とも、日本語学習者を対象にした辞書には用いるべきではない用語である。その他の「上位名詞+だ/である/をしている^⑦」という記述方法は、先に述べたように、検索の際のキーワードとして上位名詞を用いれば、当該語と類義関係にある語も探しやすく、語彙を増やすのにも有効であろう。

ほとんどの説明が、「上位名詞+だ/である/をしている」で終止していた中で、『くもん』の「白い」の記述のみが、「雪のような色をしているようす」とさらに意味記述用語を重ねた説明になっていた。「ようす」のような意味記述用語は、他の語義説明文の中にも頻出するが、上位名詞が明確であるものについては、わざわざ使用する必要性もないように思われる。

上の4つの基本形容詞に対して、「青白い」という複合語がある。これは日本語能力試験出題基準^⑧によれば、2級に相当するもので、中級レベル以上の日本語学習者にとっては学習必須の語彙に含まれる。この説明になると、「青い色を含んで白い。(『学ぶ人』)」、「少し青さを含んでいて白い。(『例解新』)」、「青みを帯びて白い。(『現代例解』)」、「青みがかって白い。(『くもん』『広辞苑』)」と、「色」という上位名詞を用いずに、「白い」という上位形容詞で終止している。「青白い」を学習する段階では、その造語成分である「青い」「白い」は既習のことであるはずなので、それを説明の中で用いることには無理はない。語の上位、下位という関係を考える際、概念の大きさによる包含関係が最優先されるが、言語の自然な習得過程において、語が提出される順序というものも視野に入れるべきことのひとつであろう。

2.2 味覚を表す形容詞における記述の実態

次に、色と同様、上位名詞を想定しやすい「あまい」「からい」「にがい」「すい(すっぱい)」という4つの形容詞の記述を見してみる。

まず、注目すべきことは、これら4語について統一された記述をしている辞書が全くなかったという点である。これは、はじめに述べたように、意味特徴を共有する語であっても、意味の微妙な差違を的確に記述しようとする場合には、同一記述方法を用いることができないということに起因すると考えられる。しかし、そうした一方で、色の場合同様、「上位名詞+だ/である/がする」等のパターンは、やはり数多くの辞書の記述に見られ、このような記述が、ある程度普遍的に行えることを示唆している。

2.2.1 上位語の使用実態

表2の通り、25種類の辞書(文末に一覧を挙げる)の中で、半数以上が共通して用いている記述は、「酸い/酸っぱい」に対する「4. a 酸味がある」(16/25)しかなかった。この「味がある」という表現は、他の3語についても用いることは可能であり、

表2 味覚を表す形容詞の記述

		甘い	辛い	鹹い	酸い	苦い
上位名詞 + ・・・	1. a 「」の 味	*1	2	1		
	1. b 「」のような 味		2			
	1. c 「」のような感じの味		1			
	2. a 「」の 味・だ/である	2	4	3	1	3
	2. b 「」のような 味・だ/である	9	7		8	2
	2. c 「」のような感じの味・だ/である					1
	3. a 「」(の) 味がする	6		1	3	4
	3. b 「」の持つ 味がする	1	1		8	
	3. c 「」のような 味がする	2				1
	4. a 味 がある(塩味が強い)	4		(6)	16	4
4. b 「」の 味 がある			2			
4. c 「」のような味 がある				1		
5. a 「」の 味・を感じる/が感じられる					1	
5. b 「」のような味・を感じる/が感じられる	1				1	
意味記述用語	I. 語の説明	*	a ~に いう	1		
	b ~を さす			1		
	c ~を 表す					
	d ~の 形容				1	
	II. 名詞で終止		a ~感じ			1
		b ~(感じのある)さま/ようす	1	3	1	3
	III. 感じだ		a ~感じだ		6	
		感じがする b ~感じがする		2		
IV. 状態・		a ~(感じられる)状態だ		2		
	ようすだ b ~ようすだ				1	

- ひとつの語義に複数の説明文がある場合には、すべて数に入れている。
- 「酸い」については、「酸い」「酸っぱい」の双方に記述がある辞書と、どちらかがどちらかを参照するように指示のある辞書とがあったが、双方に記述のある場合には、どちらも数に入れている。
- 「上位名詞+()+意味記述用語」という記述の場合には、両方で数えている。
- 「甘い」における1. a, I. aの*1は、『広辞苑』の第4版の記述に見られたものを参考までに数えた。第5版の「味がするさま」も2. a, II. bにそれぞれ含まれている。

事実「甘味」「苦味」ともに4例ずつあった。味覚に関わる形容詞以外でも、たとえば「濃い=液体の濃度が高い(『広辞苑』)」、「薄い=液体・霧などの密度(濃度)が少ない(同上)」のような説明も、その語の主体となりうるのは液体であることはわかるが、「濃度」「密度」が上位名詞として機能せず、これによって語の意味が説明されているとは到底言えない。

語に偏りなく多くの辞書がとっている記述方法といえるのは、「2. a, b, c ~味だ/である」である(甘い=11 辛い=11 鹹い=3 酸い=9 苦い=6・計40)。次に多くの辞書がとっているのは「3. a, b, c ~味がする」という表現(甘い=9 辛い

= 1 鹹い = 1 酸い = 11 苦い = 5 ・計27) である。両者のうち、「3. 味がする」の方は、「音がする」「においがする」などと共に、いわゆる五感を表す語についてのみに有効な文であり、すべての形容詞について「上位名詞+がする」という記述文は成立しない(たとえば、「赤い=赤い色がする」という記述文は成り立たない)。そうして考えると、上位名詞が立てられる語においては、「上位名詞+だ/である」が、もっとも普遍的な記述文といえるのではないだろうか。

最後に「感じる」という動詞で終止する記述文であるが、もとの語が形容詞であるのに、説明が動詞で終わっているというのは、意味を記述する文という視点からすると、おさまりが悪い感じが否めない。たとえば『大辞林』では「舌にいやな味を感じる」となっている。動詞も活用させることができるので、仮に「きのう医者からもらった薬は苦かった。」という文の「苦かった」の意味がわからないときに、『大辞林』の記述をそのまま当てはめて、「医者からもらった薬を飲んだら、舌にいやな味を感じた」と考えれば意味は理解できる。だがしかし、記述文を文として整った形にするためには、「(感じる)状態」のような意味記述用語が必要となつてこよう。

2.2.2 意味記述用語の使用実態

岩野靖則氏は、「語」「言葉」「意」などの名詞や「…いう」「…意を表す」という結びで記述されている説明を、意味記述というより、語の説明であると述べておられる。意味記述用語を用いた方法のうち、I とした表現は、これに当てはまる。a 『広辞苑』第4版, b 『言泉』, c, d 『新潮現代』のものである。c, d を引くと、「苦い=味覚で、薬などの味の形容。多くは不快感を伴う味覚を表す。」と記述されている。「形容」「不快感」「味覚」という漢語が使用され、「～を伴う」という文型も難しい。『広辞苑』『言泉』はハンディな辞書ではなく、『新潮現代』にしても、どの書店にも必ずあるようなポピュラーな辞書ではないから、使用対象者が自ずと制限されてこようが、こうした意味記述用語の難解さは、日本語母語話者にとっても、辞書の説明を難解なものとする一端となっていると考えられる。『広辞苑』が4版から5版に至って、その説明を改めたことが示すように、今後いっそう、平明な意味記述用語を使用することが必要になろう。

II の名詞で終止している文について、これは、「味」「色」のように、上位名詞で終止する場合を含め、形容詞の語義説明が名詞で終わるということに問題があると思われる。辞書には当然のことながら、品詞を含めた文法的な説明が付いているとはいえ、実際に、そこまで丁寧に辞書を調べる学習者はまれである。言語によって、同じ事象を指す語が文法的機能を異にする場合もある。たとえば日本語の場合、先の4語を除いたほとんどの色は名詞であるが、英語では形容詞である。「赤い」と「緑(色)」「紫(色)」を、文

法説明として前者を形容詞，後者を名詞と解説するのではなく，前者は「～の色である」，後者は「～の色」のように，語義説明の文において品詞の違いが際立つような工夫が施されるべきであろう。日本語は活用することで語の機能が変わるので，活用する語の語義説明は，活用する形で終止するということが，原則であると考えている。

Ⅲ，Ⅳは，Ⅱの名詞を活用できる形に改めた用語である。Ⅲの「感じ」は，感情や感覚形容詞には，ほとんどすべて用いることが可能であるが，「大きい」とか「新しい」のように，対象の属性を表す形容詞に関しては使用できない。その点，Ⅳの「状態だ」「ようすだ」は，すべての形容詞について問題なく使用でき，必要があれば，今回調査した辞書が採っている「感じられる状態だ」のように，「感じる」という動詞を変形して付け加えることも可能である。

3. 基本語以外の語における記述の実態

これまでは，基本語の範囲で意味記述を見てきたが，もう少し範囲を広げて，今度は，能力試験の出題範囲の中から，「あ」から始まる形容詞25語（表3）を取り出し，その意味記述を分析してみたい。調査する辞書は，日本語学習者のための辞書として編纂されている新潮社『日本語を学ぶ人の辞典』（以下『学ぶ人』と略称する），低年齢児童用の辞書としてくもんの『学習国語辞典』（同『くもん』），日本語学習者にも比較的使用

表3 調査対象語と『語彙表』との対応

112 「相互・異同」あべこべ ^①	306 「くわしい・たしか・あやしい」 あまいな ^② あやしい ^②	301 「光」あかるい ^①
134 「調子・出来」あぶない ^①		あきらかな ^②
	3012 「はずかしい・ほしい・ くわしい・ありがたい」	302 「色」あおい ^① あかい ^①
14 「力」荒っぽい ^① 荒い ^②	ありがたい ^②	あおじろい ^②
1660 「久しい・若い・早い」 あっけない ^①	341 「偉い・けち・すごい・不屈き」	305 「味」あまい ^①
1661 「新しい・古い」あたらしい ^①	あざましい ^①	「気象」あたたかい ^①
182 「形」粗い ^②	あくどい ^①	暑い ^① 熱い ^①
1920 「長い・広い」あさい ^②	あつかましい ^②	
1921 「厚い・太い・大きい」厚い ^①	345 「快活・柔和・勇猛」荒い ^②	
194 「速い・遅い」あわたしい ^②		

囲み数字は，能力試験の当該級を示している。太字になっているものは基本語である。

しやすしい一般の辞書として『例解新』，小学館『現代国語例解辞典』（同『現代例解』），現行の多くの電子辞書に搭載されている中型辞典として『広辞苑』の5つの辞書とし，『学ぶ人』の英訳を『Longman Dictionary of Contemporary English』（同『LDOCE』）の記述と比較してみたい。

3.1 日本語辞書の記述のまとめ

日本語の辞書の中から抽出できる，意味記述の文末パターンとして，表4のようなも

表4 形容詞の意味記述文に見られる文末表現

名意 詞味 終記 止述 型用 語	こと	あべこべ「学」「く」「例」 あいまい「広」
	さま	あべこべ「現」「広」 あやうい「現」 あたたかい「広」 あきら らか「広」 新しい「現」
	ようす	新しい「例」 あいまい「学」「く」「現」 あきららか「く」 あ やうい「く」
活意 用味 型記 述用 語	ようだ	あぶない「広」
	状態だ／である	明るい「現」「く」 あぶない「広」
	気持ちだ／である	ありがたい「学」「く」「例」「現」「広」
	気持ちがない	あつかましい「学」「例」
	感じた／である	あぶない「例」
	感じがする 感じる／感じられる	あやしい「く」 あたたかい「例」 熱い「現」
上位 名詞 使用 型	上位名詞	赤い「広」 青い「広」
	+である	甘い「学」「く」「例」 暖かい「く」(温度である) あやしい「現」(不思議さである)
	上位名詞 +する している	赤い「学」「く」「例」「現」 青い「学」「く」「例」「現」 甘い「広」
上位 形容 詞使 用型	上位形容詞	青白い「学」「く」「例」「現」「広」 浅い「学」「く」「例」「現」「広」(間／距離が短い／少ない) 厚い「学」「現」(間／距離が長い／大きい) 暑い「学」「く」「例」(気温が高い) 熱い「学」「く」「例」(温度が高い) あたたかい「学」(ちょうどいい) あやしい(変だ)「学」 あくどい(色：くどい／性格：たちが悪い)「現」
	上位形容詞+感じた	あくどい(色)「学」
	上位形容詞+感じる	暑い「く」 熱い「現」
説明型	状態・感覚にいう	暑い・熱い「広」

のがある。ここには、「あやうい＝『あぶない』のやや古い言い方。(『例解新』)のよ
 うな意味を説明しているとはいえないものや、「あぶない＝乱暴である。あらあらしい。
 (『くもん』)のように、見出し語をその上位語ではない、他の語に置き換えただけで、
 説明が文の体をなしていないものは含んでいない。

語義説明文に見出し語が直接用いられることは稀であり、通常「a」という見出し
 語に対して、上位形容詞「A」、または類義の形容詞「b」を用いて意味が記述される。
 この場合、何をもって上位形容詞とするかの指標として、次の3つの原則を考えた。

1. 基本形容詞は、それ以外の形容詞に対して上位に立つ。

2. 日本語学習の過程で、先に学習する語ほど基本的なものであるとの前提に立ち、能力試験出題基準において、下の級の範囲に含まれる語は、それ以上の級の範囲にある語の上位に立つ。

3. 『語彙表』で、同じ番号を付されている語同士は、互いに類義語とする。

この原則は、「上位」という本来の意味からははずれるかもしれないが、日本語学習の過程を考慮すると、見出し語の意味を調べるための文の中に、見出し語より後で学習することが設定されているような難解な語を用いるべきではないという前提に立つものである。この原則に則ると、次のような例は、説明に用いられている語が見出し語と同等、あるいは見出し語以上に難解な語と考えられる。(囲み数字は能力試験の級を示す。)

あやしい② = 正体がわからなくて気味がわるい②。『例解新』

あわただしい② = 心がせわしくなく、落ち着かない②。『現代例解』

あっけない① = 思っていたより簡単で、物足りない①。『学ぶ人』『現代例解』

あさましい① = 心や性質などがよくなって、いやしい①。『学ぶ人』

= やり方や考えがずるくて、いやしい①。『例解新』

新しい語を学習するのは、必ずしも出題基準の配当通りの順にはならないが、一応の基準として、極力、既習の語の範囲で説明をするのが理想であろう。はじめに述べたように、文末を結論として、とりあえず見出し語の大きな概念を理解するための記述を試みるならば、「あっけない = 思っていたより簡単だ。物足りないほど簡単だ。」のようにすれば、「簡単だ」は基本語であり、3級の配当であるから、「あっけない」のおおよその意味は理解できよう。同様に、「あさましい = 心、性質、やり方などがずるくて、よくない。」とすれば、「よい」は4級、基本語であり、その前の「ずるい」も2級の語であるから、もとの説明よりは容易になると思われる。

今回は、形容詞に対しては、「上位形容詞」もしくは「上位名詞 + 活用する意味記述用語」によって説明するという立場で考えたが、「あいまい」(2級)に対して、「はっきりしない」(副詞「はっきり」3級配当)のような、品詞を超えた置き換えについては、あらためて検討してみたい。

3.2 英英辞典の記述

『ロングマン現代英英辞典』(Longman Dictionary of Contemporary English; 以下LDOCE)は、「英語を外国語として学習する人たち、および、そのような人たちの教育にたずさわる人たちによって利用されることを特に意図して作成された辞書(LDOCE「解説と使用の手引き」p.11)」である。そのための大きな特徴として、すべ

ての語をあらかじめ選定された二千の基本語のみを使って説明してあること、多義語に関しては、見出し語の下に 'signpost' (当該語義に至るための指標となる語) がつけられていることが挙げられる。その他、語の運用に関する文法的な説明や、使用範囲・頻度の提示等、英語学習者を視野においた工夫が施されている辞書であるため、意味記述の方法にしても、参考にすべき点が多い。以下に、前節で取り上げた25語について、『学ぶ人』がそれらの英訳語として記載している最初の英単語を『LDOCE』で引き、その記述方法を分析しておきたい。ここでは、英語の辞書における記述方法について検討するので、各語が日本語の英訳として最適かどうかは問わない。

まず、日本語辞書の意味記述にはないような方法として、「1. 当該形容詞を名詞に被せて、その現象・状況を説明する方法」「2. その形容詞のような状態になったとき、どうなるかを説明する方法」が挙げられる。(以下に具体的な記述方法を挙げるが、「形」とは見出し語となっている形容詞の意味であり、下線、太字などは私に施している。)

1.1 something / noun that is **形** is / has ~

showy (あくどい) = something that is **showy** is very colorful, big, expensive, etc, *esppecially in a way that attracts people's attention.*

shallow (浅い) = something hat is **shallow** has only a short distance from the bottom to the surface.

light (明るい) = a room that is **light** has plenty of light in it, *esppecially* from the sun.

1.2 形 noun is ~

shameful (あさましい) = shameful behavior is so bat that people think you should be as shamed of it.

busy (あわただしい) = a **busy** period is full of work or other activities

日本語は基本的に修飾句が名詞の前にくるが、英語は、名詞を前から後ろからも修飾することができるため、記述パターンを2つに分けたが、方法としては共通している。「あくどいもの」「明るい部屋」「あさましい態度」「あわただしい時期」のように、その形容詞を主体としてとることのできる名詞ごと、すべての意味を解説するというのは、具体的に理解しやすく、実際の授業でよく用いる新出語の導入方法のひとつである。

2.1 if 形, ~

light (明るい) = if it is **light**, there is the nutural light of the day.

* pale (動詞・青白くなる) = if your face **pales**, it becomes much whiter than usual...

日本語の辞書では、「明るいということは、光がたくさんあることだ」のように説明

されても、「明るいときには、光がたくさんある。」のような説明は通常なされない。これは言語の相違によるものであろう。しかし、実際の説明においては、「悲しいときには、泣きます」と泣くまねをしたり、「うれしいときには、笑います」と笑顔を作ったりすることは多い。またその逆の、「友だちとけんかしたときは、悲しいです」とか、「友だちにプレゼントをもらったときは、うれしいです」のような説明もよく行う。『LDOCE』の説明は、英語学習者を対象に据えているだけに、こうした実際の授業で行う方法により近いものとなっているといえるだろう。

その他の、よく用いられている表現としては、次のようなものが挙げられる。

3. having ~

3.1 having ~

hot: weather / food / liquid (暑い・熱い)= having a high temperature

rough: not smooth (粗い)= having an uneven surface

3.2 having noun of / like ~

red (赤い)= having the color of blood or fire

sweet (甘い)= having a taste like sugar

この“having ~”をそのまま日本語に訳せば、「～を有する」「～という性質を有する」となる。英語における“have”が使用頻度の極めて高い基本的な語と言えるのに対し、日本語の方は非常に硬い、一般的とはいえない表現である。そのため、英語では、温度、材質、色、味という、上位名詞の全く異なる形容詞に対して、すべて“have”を用いたほぼ同じパターンによって記述することが可能であっても、日本語となると、必要以上に難解な表現を避けて語義説明をしようとすれば、それぞれの上位名詞に適宜意味記述用語を付随させて記述するということになってしまう。

4. especially / for example because

thankful (ありがたい)= grateful and glad about something that has happened,
especially because without it the situation would be much worse.

* sad (悲しい)= unhappy, but especially because something unpleasant has happened
to you or someone else

* happy (うれしい)= having feelings of pleasure, for example because something
good has happened to you.

上記，“showy”、“light”の説明でも“especially”は用いられていた。

全体的に『LDOCE』では、例を挙げたり、主体となる名詞を添えたりして、非常に具体的な記述になっているということがいえるだろう。

4. まとめ

様々な文脈、場面、使用者によって用いられる語から、抽象される語の意味を記述しようとするものが辞書である。語の意味を体系的に記述する、できるだけ普遍性のある方法というのを想定するならば、次のようにまとめられる。

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 見出し語の上位名詞+である | (例: 甘い= ~味である) |
| 見出し語の上位名詞+程度を表す形容詞 | (例: 暑い= ~温度が高い) |
| 見出し語の上位形容詞 | (例: 青白い= ~白い) |
| 見出し語の上位形容詞+感じた | (例: あくどい= ~いやな感じた) |
| 動詞などによる説明+状態だ | (例: 明るい= 物がよく見える状態だ) |

文末は、形容詞そのままか、意味記述用語を用いた活用できる形にする。説明に用いる語は、見出し語よりも下位にあるもの、見出し語に出会う前に、既習の語と考えられるレベルの語にする。

使用辞書(字数の都合上の出版社、書名、版のみ挙げる。版のないものは初版。)

新潮社 日本語を学ぶ人の辞典

新潮国語辞典第2版 新潮現代国語辞典第2版

三省堂 例解新国語辞典第5版 現代新国語辞典 国語辞典

新明解国語辞典第5版 ハイブリット新辞林 大辞林第2版

小学館 例解学習国語辞典第6版 現代例解国語辞典第2版

言泉 大辞泉増補新版 日本国語大辞典

学研 現代新国語辞典改訂新版 国語大辞典

旺文社 国語辞典第9版

講談社 国語辞典第2版

岩波書店 広辞苑第5版(CASIO XD2000) 国語辞典第5版

角川書店 新国語辞典 角川国語大辞典

くもん 学習国語辞典改訂新版

明治書院 精選国語辞典新訂版

教育社 15万例文・成句現代国語用例辞典

LONGMAN DICTIONARY OF CONTEMPORARY ENGLISH 第3版

注

- ① 「現代語辞典の輪郭」(『国文学 解釈と鑑賞』54-1号, 至文堂・p.71)
- ② 荻野綱男氏も, 「とじごよみ=書物の形をした暦」を例に挙げ, この場合の「名詞」は「見出し語よりも広い概念を表すもの」であり, それを「上位語」と称している。(「定義と命名」『講座・日本語学8 文体史Ⅱ』明治書院・p.241)
- ③ 「たんす」も「1.4生産物および用具」の下, 「447.家具」に分類されている。
- ④ 「国語辞書における形容詞の語釈の類型」(『同志社女子大学学術研究年報』第43巻・p.25)
- ⑤ 本稿における基本語の範囲としては, 玉村文郎氏選「日本語教育基本2570語」(NAFL日本語教師要請通信講座テキスト『日本語の語彙・意味(2)』)に含まれる語としておく。
- ⑥ 「語義記述の問題点」(『朝倉日本語新講座4 文法と意味Ⅱ』・p.94)
- ⑦ 大島氏は先の論文の中で, 「あおい=晴れた空や深い海の色をしている。」や, 「あまい=砂糖や蜜のような味だ。」の下線部を「上位語相当の語」とされている。
- ⑧ 国際交流基金著作・編集「日本語能力試験出題基準」(凡人社)による。
- ⑨ 「辞典の意味記述の文体」(『講座日本語学8 文体史Ⅱ』明治書院/p.257)